

紹介する 実践研究	Butler, Y. G. (2018). The Role of Context in Young Learners' Processes for Responding to Self-Assessment Items. <i>The Modern Language Journal</i> , 102, 1, 1-20		
doi	10.1111/modl.12459/0026-7902/18/1-20		
紹介者	アレン玉井光江（青山学院大学）	更新年月	2020.04

本研究の目的は、①一般的な自己評価（generic self-assessment）とタスクを行ったあとの自己評価に差があるのか、また②児童が自己評価をするとき、年齢により自己評価プロセスに違いがあるのかを検証することです。3月の報告書では①についてのみ触れましたが、今回は②について報告したいと思います。報告の前にもう一度研究の進め方について簡単に説明しましょう。31名の日本で英語を学習している日本人児童が、英語の能力に関する9項目について自己評価をし、その自己評価についてインタビューを受けました。そのうち実際にタスクをこなし、再び自己評価をして、2回目の自己評価についてのインタビューも受けました。研究では、Higgins, Strauman, Klein (1989)の4つのカテゴリーに基づき、この二つのインタビューが分析されました。

「(評価するために) 関連したできごとを思い出す」段階において、一般的な自己評価では、年齢差があったそうです。年少グループ（8-9歳児17名）では直接経験した成功例や失敗例を思い出すのに対し、年長グループ（10-12歳児14名）は直接経験したこと以外のできごと、または場面を想像して評価したそうです。例えば、「英語で先生の指示が理解できる」という項目に対し、年長グループの児童は「先生の指示は、わかるように話してくれるので理解できるけれど、わからない英語の指示はたくさんあると思う」と答えたそうです。しかし実際に（人形からの）英語の命令に従うというタスクをした後の自己評価では、年齢差はなく、参加児童は実際のタスクに基づいて自己評価をしました。

また何を参照に自己評価するのかに関しては、一般的な自己評価の場合、年少、年長グループともに「最近経験した複数回のperformance（出来ばえ）」を参照したようです。ただ年長グループでは「自分が決めたゴール」を参照する場合も見られたそうです。例えば「短いお話を読むことができる」という項目に対し、10歳の児童は「リスニングの力とリーディングの力はつながっており、私はリスニングは大丈夫なので、リーディングもできるはずである」と答えています。タスク後の自己評価では、年齢の差はなく、そのタスクが要求している能力の解釈が参照のポイントとなっています。

ヨーロッパ共通参照枠で示されているような抽象的な質問（例：「ゆっくり、はっきりと話され、言われている意味がわかるまでポーズがあれば、理解できる」）は、幅広いコンテキストに応用できるように、意図的に漠然とした内容になっています。そのため、回答者はある出来事や経験を思い出し、自分の力を判断・評価します。子どもたちがどの時点の出来事を思い出し、何を参照に自分の能力を評価するのかは、個人差、年齢差があります。この研究が示すように、年齢が上がるほど、学習者は実際の教室での学習経験以上（または以外）の事柄、または想定される目標を考え、自分の力を評価するようになります。年齢の高い学習者は自己評価が厳しくなりますが、その評価にあまりぶれはないそうです。一般的な自己評価には、学習者が自らの知識・技能の習得度合いを反映するというよりも、学習者の学習経験、自尊心、自信、自己効力感、動機などの様々な要素が反映されているようです。一方、タスクを行ったあとの自己評価はそのタスクの内容、また出来栄に答えが大きく影響されます。このような違いを理解して、授業改善にはどのような方法で自己評価を実施するべきか十分に考慮する必要があるでしょう。これからも自己評価は小学校現場で活用されると思いますが、その使用について本研究は多くの示唆を与えてくれます。